

『歴史総合 近代から現代へ』

目次

巻頭資料 諸地域世界の形成

- 東アジア
- 南アジア・東南アジア
- 西アジア
- ヨーロッパ

第1部 近代化と私たち

近代化への問い

- ①交通と貿易／②産業と人口／③権利意識と政治参加や国民の義務／④学校教育／⑤労働と家族／⑥移民

第1章 結びつく世界

- 1 アジア諸地域の繁栄と日本
- 2 ヨーロッパにおける主権国家体制の形成とヨーロッパ人の海外進出

第2章 近代ヨーロッパ・アメリカ世界の成立

- 1 ヨーロッパ経済の動向と産業革命
- 2 アメリカ独立革命とフランス革命
- 3 19世紀前半のヨーロッパ
- 4 19世紀後半のヨーロッパ
- 5 19世紀のアメリカ大陸

第2部 国際秩序の変化や大衆化と私たち

国際秩序の変化や大衆化への問い

- ①国際関係の緊密化／②アメリカ合衆国とソヴィエト連邦の台頭／③植民地の独立／④大衆の政治的・経済的・社会的地位の変化／⑤生活様式の変化

第5章 第一次世界大戦と大衆社会

- 1 第一次世界大戦とロシア革命
- 2 国際平和と安全保障
- 3 アジア・アフリカ地域の民族運動
- 4 大衆消費社会と市民生活の変容
- 5 社会・労働運動の進展と大衆の政治参加

第3部 グローバル化と私たち

グローバル化への問い

- ①冷戦と国際関係／②人と資本の移動／③高度情報通信／④食料と人口／⑤資源・エネルギーと地球環境／⑥感染症／⑦多様な人々の共存

第8章 冷戦と世界経済

- 1 集団防衛体制と核開発
- 2 米ソ両大国と平和共存
- 3 西ヨーロッパの経済復興
- 4 第三世界の連携と試練
- 5 55年体制の成立
- 6 日本の高度経済成長
- 7 核戦争の恐怖から軍縮へ

歴史の扉

- 1 歴史と私たち 日本と洋菓子
- 2 歴史の特質と資料 台湾における砂糖の生産

- 6 西アジアの変容と南アジア・東南アジアの植民地化

- 7 中国の開港と日本の開国

第3章 明治維新と日本の立憲体制

- 1 明治維新と諸改革
- 2 明治初期の対外関係
- 3 自由民権運動と立憲体制

第4章 帝国主義の展開とアジア

- 1 条約改正と日清戦争
- 2 日本の産業革命と教育の普及
- 3 帝国主義と列強の展開
- 4 世界分割と列強の対立
- 5 日露戦争とその影響

近代化と現代的な諸課題

- 自由・制限／開発・保全

第6章 経済危機と第二次世界大戦

- 1 世界恐慌の発生と各国の対応
- 2 ファシズムの台頭
- 3 日本の恐慌と満洲事変
- 4 日中戦争と国内外の動き
- 5 第二次世界大戦と太平洋戦争

第7章 戦後の国際秩序と日本の改革

- 1 新たな国際秩序と冷戦の始まり
- 2 アジア諸地域の独立
- 3 占領下の日本と民主化
- 4 占領政策の転換と日本の独立

国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題

- 対立・協調／平等・格差／統合・分化

- 8 冷戦構造のゆらぎ

- 9 世界経済の転換

- 10 アジア諸地域の経済発展と市場開放

第9章 グローバル化する世界

- 1 冷戦の終結と国際情勢
- 2 ソ連の崩壊と経済のグローバル化
- 3 開発途上国の民主化と独裁政権の動揺
- 4 地域紛争の激化
- 5 国際社会のなかの日本

第10章 現代の課題

- 1 現代世界の諸課題
- 2 現代日本の諸課題

現代的な諸課題の形成と展望

特徴紹介

中家 健

今 回の学習指導要領改訂では、すべての教科・科目において、「何(どのような内容)を学ぶか」ではなく、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」が問われるようになった。そのなかで新科目である歴史総合では、「歴史的な見方・考え方」を身につけるため、現代的な諸課題につながる近現代を思考・判断・表現する学習が求められるようになった。

山川出版社でも、この趣旨にのっとり3種類の歴史総合の教科書が発行されるが、なかでも本書は、歴史総合の学習のみではなく、歴史総合の履修後に生徒が世界史探究・日本史探究を選択することを視野に入れた構成となっているところが特徴である。

探究につながる詳しい記述

現代的な諸課題につながる近現代の歴史を題材に「歴史的な見方・考え方」を身につけるには「なぜそうなったのだろうか?」と問題意識をもち、みずから問いを立て、考察する必要がある。その前提となる基本的な知識を習得できるよう、本文の充実がはかられている。本文は全体を時系列的に取り扱い、歴史事象の背景や因果関係がとらえられるよう、内容の安定性や正確性で定評のあった、従来の『詳説世界史』『詳説日本史』のテイストを保持しつつ、世界史と日本史とを結びつけて詳述している。

学びのきっかけとなる問い・資料を配置

歴史総合の学びにおいて生徒に求められるのは、個々の歴史的事実を確認することだけでなく、みずから問いを立てることを通して、歴史事象相互の関係性を見きわめ、それにもとづいて説明できるようになることである。しかし、授業開始の段階から、自分で問いを立てて学びを進めるのは容

易なことではない。そこで、本書では各部、章や節の冒頭をはじめ、本文の各所に「歴史の流れ」を把握する手助けとなる問いを配置した。こうした問いに正対する経験を通して、「みずから問いを立てる」学習活動に臨む際の参考となるように配慮したものである。また、これらの問いは本文を読む際の着眼点にもなるものである。

取り扱われる近現代は、地域ごとに進行していた「歴史の流れ」が相互のつながりを強め、戦争や感染症という不幸な側面をも含めて、一体化を深めてきた時代といえる。この時代の、日本を含めた世界の動きをとらえられるよう、読み解くべき情報を含んだ史料や絵画・写真、グラフやデータ、地図も配置されている。

歴史事象を総合的に考察する工夫

本書では、歴史総合の学習の流れに従って、各部の冒頭に「○○への問い」を設け、問いの題材となる史資料を豊富に取り上げている。あわせてその注目すべき点を示しつつ問いを立てることをうながすかたちとなっている。また、各部の最後には、現代的な諸課題の例を、それぞれ考察をうながす問いとあわせて示している。

そのほか、巻頭資料「諸地域世界の形成」では、歴史総合で扱う近現代以前の各地域世界における過程がたどれるように概論と各時代の勢力図を配置した。また、各所に掲載した史料や動画の2次元コードも活用できる。

なお、歴史総合で求められるものは授業で完結するわけではない。体得した学びの手法を駆使して、現代的な諸課題に取り組むには、積極的にみずから情報収集をする姿勢や、他教科・科目をも含め総合的に考察する態度が求められる。本書はこれらを涵養する基礎となるだろう。

(なかいえ・たけし／東京都立小石川中等教育学校教諭)

歴史の扉

——日本と洋菓子

小豆畑 和之

「歴史総合」という新しい科目が始まる。永く、日本史・世界史という分類に慣れてしまったわれわれ(教員)には、不安が強い科目であるが、考えてみれば、歴史には本来、日本や世界などの区別はないので、むしろ肯定的にとらえ、教材化することを楽しんでみたい。暗中模索中の私案を提示するので、ご検討いただけると幸いである。

前提として、高校入学後の必修授業に「歴史総合」があり、生徒全員が教室でiPadなどのタブレット端末を、通信環境を含め利用可能としている。

また多くの教育ソフト・アプリがあるなかで、ここではMicrosoft Teams (以下、Teams)およびSway、Microsoft Forms (以下、Forms)を教員・生徒が利用できるとして、授業案を考えている。基本はTeamsで、Swayというスライドをみせるアプリと、質問・集計をおこなうFormsを切りかえながら授業を進めていく。

ここで一言、筆者の体験を記しておきたい。10年ほど前、大学の先生との話し合いのなかで、「ICT」の「C」はコミュニケーションの「C」であるが、高校ではPCなどを使えば「ICT」授業といっている例が多いのではと指摘された。筆者自身もいくつかの授業例をみていて、PCを使うことが目的ではないかと思うことがあった。そこでIT機材を使う必然性を示す意味で、この授業案では、教員と生徒とのコミュニケーション、という観点から、「双方向性」「同時性」ということを重視した。そのため特定のアプリの使用が必然となったことをご了解いただきたい。

導入

授業者 これから、歴史総合の授業を始めます。

この科目は、近現代の世界や日本の歴史を、文字通り「総合的」に学ぶものです。中学校で学んだ歴史を発展させ、本格的に歴史を「探究」する橋渡しになる、重要な科目です。でも深刻にとらえず、まず身近なものに注目し、それを手がかりに、歴史を学んでいきましょう。

授業者 では質問です。スクリーンをみてください。「思う」と「考える」の違いは何でしょうか。

※授業者がSwayを開き「思う」と「考える」の違いを質問する。指名し口頭で解答でもよいが、できれば双方向性という点から、生徒がFormsで、意見を書き込むようにしたい。教員はその意見をスクリーンに投影するが、生徒の名前は記号などにし、匿名性を担保する。ふざけているような意見であっても、この段階では注意しない。

授業者 では解答の例として、大野晋先生の説を『日本語練習帳』(岩波書店、1999年)から紹介します。(Swayのスライドを進め、図1を映す)

このような違いがあるということです。これは歴史を学ぶうえで重要なことなので、覚えておいてください。これからみなさんは、世界のいろいろな人の考えを学びます。そのときに、自分と違う考えを排除しないでください。それは、他人を傷つけ、自分をいやしめる行為です。いったん受け止め、いろいろな方向から「考えて」ください。

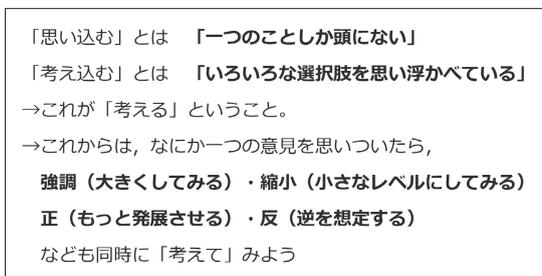


図1 Swayのスライド

展開

授業者 (Swayに戻りスライド画面を進める)ではみなさんに質問です。みなさんのおすすめのお菓子を教えてください。店で買うものでも、自分でつくるものでもかまいません。お菓子の分類(洋・和)も入力してください。(授業者はスライドを進めて、Formsの質問画面<図2>をスクリーンに投影する)

※これは本当に授業の「マクラ」であり、ガヤガヤしてよい。

授業者 では、日本では洋菓子和菓子のどちらが多く食されていると思いますか、投票してください。(授業者はスライドを進めて、Formsの集計画面をスクリーンに投影する)

なるほど、そうですか。実は、総務省家計調査報告によると、2016年の1世帯当たりのお菓子支出金額は、和生菓子和せんべい代の合計が17,393円、洋生菓子が18,894円でほぼ同じです。日本では、和菓子も洋菓子も同じくらい日常生活の一部になっているのですね。ではまず和菓子について、考えてみましょう。

授業者 まず江戸時代の18世紀の状況を見てみます。当時江戸の人口は100万人を超えており、武士が約半数を占めていました。そのため男性が圧倒的に多く、外食を提供する食べ物屋の需要が強かったようです。史料によると、文化8(1811)年に食べ物屋は7,603軒あり、そのうち菓子類の店が2,866軒、そば屋が718軒、すし屋

図2 Formsの質問画面

217軒などとあって、菓子を販売する店が多いのです。18世紀に出版された菓子の本では、100を超える製法が記されていて、日本は庶民が菓子を楽しむことができる国でした。つぎの絵から、当時の江戸の人気商品は何かみてください。(授業者はスライドを進めて、Sway画面をスクリーンに投影する一方、生徒は各自の端末で拡大してなかの絵<巻末図版>をみる)

授業者 また日本という国の特徴とってよい点の1つに伝統の継承があります。帝国データバンクという会社のデータベースによれば、日本には300年以上の歴史をもつ老舗企業が435社もあります。これは世界的にみてもすごい数字で、世界の200年以上続く長寿企業の半数以上を日本企業が占めています(図3)。特に、世界最古の企業である建設業の金剛組(578年創業)をはじめ、2位・3位も日本企業なのです。

ここでみなさんに質問です。各国最古の企業の業種をみると、その国らしさが出ています。日本は建設業ですが、ではフランスとドイツは何だと思えますか。(これは口頭で質問する。もし生徒に関する情報、クラブや趣味などがわかっているならば、それに関連した生徒に発問するなどの方法で、中だるみを防ぐ)

授業者 フランスはワイン醸造(1000年)、ドイツはビール醸造(1040年)です。お国柄がでてますね。アジアでは中国をみてみましょう。伝承

	国名	企業数	比率
1位	日本	1340	65.0%
2位	アメリカ	239	11.6%
3位	ドイツ	201	9.8%
4位	イギリス	83	4.0%
5位	ロシア	41	2.0%
6位	オーストリア	31	1.5%
7位	オランダ	19	0.9%
8位	ポーランド	17	0.8%
9位	イタリア	16	0.8%
10位	スウェーデン	11	0.5%

図3 創業200年以上の企業数と比率(周年事業ラボ「調査データ 世界の長寿企業ランキング、創業100年、200年の企業数で日本が1位」https://consult.nikkeibp.co.jp/shunenjigyo-labo/survey_data/11-03/〈最終閲覧日:2021年3月9日〉より作成)

としては、16世紀に創業した漬物店「六必居」が最古ではないかといわれますが、疑義もあるようです。また中国の企業の歴史を調べるのには困難な点があります。現在の中華人民共和国の政体を考えあわせ、中国の企業の歴史を調べるうえでの困難とは何でしょう。この問題は、定期考査の問題の1問として出題する予定です。みなさん同士でいくら相談してもかまいません。何か思いついたら、Teamsでチャットにのせてください。それに対し、違う考えの人は、根拠をあげて反論してください。チャットする場合は、最低限のマナーを守ることを忘れないようにしてください。

授業者 では、教科書(『歴史総合 近代から現代へ』) p.13をみてください。江戸時代に続く明治・大正時代には、欧米化が進みます。和菓子と比べた洋菓子の特徴は、卵や乳製品(バター、クリーム)を多く使うことです。教科書には、いくつかの製菓会社のことが書かれています。興味深いのは、各企業が何をアピールして菓子売ろうとしているかです。つぎの写真をみて、何と書かれているか読み取り、何をアピールしているか考えてください。(授業者はスライドを進めて、Sway画面をスクリーンに投影する

図4 大正時代の菓子のパッケージ(左が大正3年の「森永ミルクキャラメル」(森永製菓株式会社提供)、右が大正11年の「グリコ」(江崎グリコ株式会社提供))



一方、生徒は各自の端末で拡大してなかの絵(図4)をみる)

授業者 こうした考えの背景には、欧米に追いつけ、追いこせという風潮があったのではないのでしょうか。日本でビスケットの製造が盛んになったことには、こうした事情が関連していたのではないかと思います。ビスケット(Biscuit)とは、原義はフランス語で「2度焼く」の意味で、「長期間保存ができるよう2度焼いたところからこの名前がついた」とされ、船乗りの食料として重宝されました。イギリス海軍を範とした日本海軍によって軍需品として採用され、戦争のたびに、その生産量が増えていきました。

授業者 ビスケットのように、戦争とわれわれの生活には関連があります。教科書p.236にはいくつかの例があげられています。

こうした例を参考にして、身近なものの起源について調べてみましょう。これはレポートの課題とします。○月○日(1カ月程度後の日付を指定する)までに、Teamsの「課題提出箱」(図5)に提出してください(課題提出箱はTeams内に授業者が作成しておく)。提出の際には、クラス・番号・氏名・タイトルのほか、参考文献と引用ページを必ず記してください。参考文



図5 Teams上の課題提出箱

献である以上、ネットからのコピー＆ペーストは不可です。必ず実際に本で調べてください。ネット上の情報は確実とはいえません。本は作者のみならず、出版社の多くの人が検討を加えたうえで出版されています。信頼性は比べ物になりません。調べてまとめる際には、「対象とした身近なもの(できれば菓子)の名称、どの地域に由来するものか、どのような経緯で日本に普及したのか」などに注意してください。字数については制限しません。優秀なものは、Teams内で発表する予定なので、生徒間では一定期間、公開されることを了承してください。

授業者 さて、第二次世界大戦敗戦後の混乱が一段落すると、経済統制が解除されました。1960年代には、教科書p.197にあるように、テレビ・洗濯機とならんで冷蔵庫の普及が進みました。するとシュークリーム、プリンなどの洋菓子が人気となりました。1970年代以降は、アメリカを中心とする外国企業の進出がめだつようになり、ハンバーガーやアイスクリームなどの外食産業が拡大しました。そうした国際化の波は、平成に入ってさらに深化しており、欧米だけでなく東南アジアのお菓子や食材も人気を博して

います。一方で和菓子もその動きに対応して、新たな魅力を創造しています。教科書p.13にあるように、海外で抹茶味の様々な菓子が人気となっていたり、そのままで通じる日本語も増えているようです。

まとめ

授業者 このようなかたちで歴史総合の授業は進んでいきます。歴史は暗記科目ではなく、みずから問いを設定し、考えていく教科です。ぜひ楽しみながら学んでください。

おわりに

以上、歴史総合という科目の導入として、「歴史の扉」を題材とした授業案を紹介してみた。ご覧になってお分かりのように、この授業では、本格的に歴史事項を教えていくというスタンスではなく、ガイダンスがわりというスタンスである。教科書にはここにあげた以外の例も載っており、多くの展開例があると思う。少しでもみなさんの参考になれば幸いである。

(あずはた・かずゆき／東京都立西高等学校教諭)